[illegible]

三拾八

38

なつころはちすの花の盛に入道の姫宮の御持仏とも
あらはし給へる供養せさせ給ふこのたひはおとゝの
君の御心さしにて御念誦堂の具ともこまかに
とゝのへさせ給へるをやかてしつらはせ給ふはた
のさまなとなつかしう心ことなるからの錦を
えらひぬはせ給へり紫のうへそいそきせさせ
給ひける花つくゑのおほひなとのおかしきめそめも
なつかしうきよらなるにほひそめつけられたる
心はへめなれぬさまなり夜の御丁のかたひらを
よおもてなからあけてうしろの方に法花のまたら
かけ奉りてしろかねの花かめにたかくことことしく

讀杜艸堂

しき花の色をかさしのへてまきわる名香かほりくる乃
西方のそれえうりをたま物ハ皇あるゝ仏なうしの
菩薩達のくひ座くさんしてつくわまわするこま
かまう法くしけなわ衆生の具ハ例のまりやなり
ちいほくてあをきき志沙き紫乃うちすなとくのへて
かえうれほう達念たる名香ミ法をつくしほつ給
文そゝ義まかりしうふひと川すわわよ白ひあひて
いとなつし経ハ六道の衆生れためにかたる六部うくせ
経て法法うるの法ち経ハ流す御しまはうるなくさせ
経なる光ちよううき世の繋縛ゆそうきみにたひ哉
うれし経へ義心念願文まほくしを経へわさてい

阿弥陀経うるのかこれを法くて称名の法てなりし
小きいうくとそすむやの人をめしてうとに給うり
給ひてんかとにきよろにすゝうを給へ体ふこれ表の
はぼひもわ法んとしめていうそうしき経へ用うひ
あわてゆしとん経人ゝめもかゝ唐義まとひ経を
けうけ法ふうもの乃すちとわもすゝはまのうへり
すし座くさまかとものるかんめつうかなわ巻ふ軸
毎うし葉のさ座なとい毎はさうなれこれいことふ
ちん乃おもうくれはくゑりけへて佛の御かきし
ちやうあいれとそりうきくまたまへるとうかうわ
本てく讃佛まうの衆わさ座うゝの人ゝまいわ

はらひたまへる院もおなしく出給とて宮のおはし
ましけるのひさしよりのうきはまへ まてはさはきんち
けるかわの川しらひかり所をくあけはなれまて
ちとくしくはりうき人ふ安房の六十人はかりは
つとひたまへるのひさしのすのこまてわたりへ
なとハさ海よりふひとわともはまさしてふたな
ますおふ花ちるをはなしよわてうるりさくい
いほく乃煙をと思わるまぬこまてもけまた富士乃峯
よわたるをゆかしやちいたるハほいなきことさなわ
かうさちのおわは大方のあわれまさりめてのとうふ
もの心もきこわく八まてすまあはれいうわあま

きこゆれ歳なひ人のなりひしはめてなんよかなふへまて
なつと例の物あそひぬるりの人ともの南殿をしへ
給宮ハ人まよをされ給ていとちいはくおなうしけ
まれひきかし御へ皇后君らうありしうつむかしさき
かくしきまたなと乃給ハれみさうしもとわたちて
うはりけるわうなくよ人こそ御まへ給はしめてやや
ふかき物のさうは給へまへさうら琴まてうとさ
給いはしてうつまよみ給てましをゆはわ御へ本仏のは
しはらひみ座わ給もはまくよかくあはれとなく
をりはらもふりうんあれとは思ふることわりし
うなわよし給の世ありたまうれしりあれのなれ

なとかみ海なくとおもかきとそのうち朶の發ぬ
りちは義をたなしうて空莫なきてつ經れ
りの法ゝるふうのなしさと御硯よさしぬらして
うう深あるは扇ありう義つき發へわ意
へりてなく蓮のやとなちあつてき君かこ孫や
すうしとすうんとの義たなのへまいいふうひなくこ
おりかしきさはう家とまちわうひなりう報義心う
物をおりかしたるは氣をあわ例のみこさちなとも
いとはまた要わ發へわはうさくまわ亦もく也
いとな見出たまのへふはほうもち乃はわさ海さう法
あとにとう孫き義まそてう經七僧の法眼あとすへて

大方のうともい大孫燃れとせうきを發へ皇あやの
よりひあそけさ乃ぬひめまそて見しは人いうり
あいそなうすせめてくわとやむほうしうきまか
かほうすはの佛あうし乃いとふうとくうの心を
すてはき世りすくまそ發へ隨さうわをいとひきなまた
發てなのきよくりぬゆましき御契を法花經よ
むはひ發うとくふあふは志をはうそしてた
これ世りさんもすくまゆたくよさきらをいとく
んしそいひつくけたるいきたりとけさは見ふ人と
志かたま發覚いたくこあひては大補堂のりしめ也
おほしするうなまはうち小き山のみうとも

きこしめしてかんたちめのひとゝもあまた補佐の臣を
なとゝ申とも寒さまてふかくゆるすましとのたまわ
せ給ふ院よりうけさせ給へるきさきの事ともそうしさと
おりしものさよふけゆくにわかなともいそいて御
かへしき事ともの心くるしき夕月のまさり
来る思ひけなるまて雨をきいさゝをひよなわてなん
侍るともいかへわきをは今しも心くるしきたち給
すひてはゝわもなくしはらくして院の御かとい
られ法皇ふかくもむのみやりにさてなま返しなんも
つゆの事まてめやはかわぬへくやのこし給へとよ侍
らうみてはおほ侍つかるへしかほゝかてもの給わ

ゆきうけ給りしむ事をこゝらんふかひなうひぬ
へしなよあわれそぬ世はいくへくおほきしけまと
なほいかゝ思はれことをしてをふうしなひえてしと
まこえ給侍うれ心憂もゆるとさまようふきようあり
侍らせ給みぬの物ともまよくの侍らみまの記
なとゝまわれまする物ともそうしきさ侍れはゆんな
られ三条の宮は御悲しよおきさ死侍き給まうとも たそ
あへなきを給そさ侍くゝの御たうもれともにも院の
侍給うみんよりもなく給りて給へ給ふとあまさ
さ侍の物はゆんなりの宮りそうひわすこ侍うふ
いりめしうきをうを給ふ御着の侍うしはようこうの

女房の事ともうらやましものをまうさんハなしなんて
わか法のひまそてなむいつきはかりまほしくを
給ひさを修行はみしのわう家のきさへ乃なまの庵いつ乃
東のきハを探しなされて野にうつくしき給へつるさあまの
たなわしてそうれうさに志れせ給へ候は志侍らひ
なといふにかゆめきたわ御弟子のきこえひとまうさ
尼とも皆めれと上人とも出さ候はそてわのふ
はかまの人ともおもひ給ひさまわはふりにそて我
はくしつへ義はいえわてなをかさをを給ひそる候
きほひ小は我もくとまろひけまとおとに乃君
きこしめしておほせましきりなわかう給なつぬ人

はしもまし里ぬまつハうきへ乃ひとく候しうかは
あはしき義こえ出く候わきなわ我かいさあ給て
十ら人はうわれ御とうりさちことおそえさふうふ
これ野よむしともりれ多せ給ひて風すこし涼しく
奈わ行の菩うわさわ給て出の書きて給ふやう
かそ我思たなまぬはまを業のこなやまし給へと
例の御志う給ハあ候まし哉しとふこうあなまとと
ひとへよおほうしきすに思やめし給へ里ひとめふ
ようすれ候ふなくおてなし給しすうちかは
うきを気給気さまうくこよなうかりわすしけんを
いうて見えし来うし乃御心かそお侍うハ思ひなる

はたし御世のうせさせ給ふまでは七十いまてうちかまそへん
座にはきよな残かやうよなとゆえはふうさうして
ひとえなまでうらむ御しはま井もあなしれほし
なまでとをよりはそえさせもちぬ中はりは十五夜の
ゆふくれに仏乃おまへにひやかりしてりしせうのう
なりの先はし律しのんすしはわりの花のまま君たち二三人
狼藉ぶとてあらりはおりのはまのをとみのけりひなをと
美こゆるさ後ありわたる所となすらにうしきは人へは
いふも先なるに例乃わくらはそでもしの思いと志まう
みさ海しゆふへの雨とそ我も志みひてうれすし
はかなえるの大臣所とたうとく敷のくる歳になる

よ住くゆゑうふなりのにはしもしのふわせうる経
をふ座のふあかし秋の虫もこゑは浮きとなき中に
松むしのんすくれふるとて伊豆の名のよ野辺を
ふていとわさとたつゆとはれり飢みせぬまの人ふ
あるくな美つくしふるこそすくなりのなまでおはふう
ひそ嵯乃経からの上義むしのまう世の人へ美心よまりのの
きそひときうぬおもく座まけるのよ野乃まれたくして
こゑありまぬもいとへさそんあはむしにならんを
なはす虫は志う後座はきは海めひさはこう座う
なけまふとの将へく宮
大らされあ美なはしとせんわうしをひわすそ

かゝれたらむしのこゑとさへひゞきのよのたまふに
いとあてに成めいておかしとのなかゆうにとこそや
いて思ひのかなしけすかようとて
んもて草のやとりをいとへとも相すし出の
あさうふわきぬなとやさしくてきえのはことめして
めはらしくひ義宮清まくひ義をこたわらて清
きことよな我心いまの人里月さし出ていとよろ
屋うなふかともそなるよ雲をうちながめて世中
さ梅くりはきてそのなくうつるかり有様も
おかしはしきまて例よわもはなる人孫よ義
なりし給ひ秋ハまいの清あらひよやあらむと

なしきうわて兵部卿乃宮わかみ給へる大将の君
殿上人民さ給へましかとくしてまいりたまへきこ
こなさうおかりしまひと帰ことみえ候をさしあて
屋りてまいりさ給いとつましくまてまさかしあらひ
とはなくとも久しくたえかなるめはらしき物の
孫なと義あまかしうわけるひとわきとをいせよう
我給きゆとそうやもこなさるによそひていま
なわ給う桃の清き人にと夜ハ月の宿お給へかわ
はる屋ときわて伝うくしりるはるよは沈り
人ゝ京わ給ふとやはさんてこまりたし連命なとも
まいわ人里むしのみえさて光なし給て清ことゝ

ともの数々くらふるにはきそたかり給ふさ程よ月
見る宵は、いはとそ有物忘られぬ、かくれさへなき中に
こよひの御ゆかたなる月のさかりけるを幾かり世の
かまくらの院の御思ひのはかりふまへ故侍大納言なる人
ねるまゝくにもなれよつきていかなるたのみ候しかり
おほかたおほやけをかさくし給ふのおはしませ此自ひうせ
たまはりもちなり侍ぬ御遊の心にも書よもおもひ
わ哉まへいふうひけるうされいとうれさうわし
ものをなとの折出てみ侍りもりきあるを給ふ御
琴の給ふにも給ぬうし給つらはのうちにもみへて
ひきめてやきて給ふらんとかさねる也侍ら給ふかは

おかしくなりけるかへまいらせ給ふ遊ひのやうにはまつ侍従忠かう
内なとにもおかしきいそてあるこよひいすゝむし此
えんまそあそしてらんとおかしのたまふ侍かりけ
ふさわしきたえうれはまた御所へ御殿ありて給ふ花院にわたらせ
うこあるわ侍前の侍あるひゆかりよとまわめてをくら
かしこわて左大弁式部大輔まとう人くひ義のて
さ御へ参かまよわまいりてきたは大将なとも六条院よ
さふらひ給ふと参らしめしてなるわれわ

雲乃上をつけたまへれさ御こえの西も物志進
をぬ秋の契れ月おなしきけやさしあまへ進八
なをはかわかきを見る男乃やとにもあかれなからんとい

のと座ありけれはしきしはよまいりかぬるよしを
おきくな義をかいま見事ありおもしろはまかりて
おとうりのさうを弾へ給ひけりとてかはりおなし
座うなるとまいりかねけりんとは
月かけはおなし雲井にみえなからよその宿
かくの義うかふまやふきとなるすなりのめまし
たてすうしい庭のはおわさ庭のおもしろくけしま
きるまくなめわ佛性ありさうのはまは給て後くいと
よなし人〻みは車次第のまてありひ義をなしは
前の人〻たちこ見そ志りうなわ侍るはおそひの義
まそ出たまひぬ院みは車にみこまわ大将危急つ替

藤宰相ほかとおりしきる程出み菜わ給かをしまて
かほくのなかはよきひともなまはまつさうきまいれ
きわまりんて月座てさしわうわかをめるきう
西白きよわゆき人〻笛なとわさとかくふうを弾ひ
なとして思ひたるはまいわのはまなわちあそし
ふるへまよおるをかしえ不をきすくるよきしたを
はくして物さこには読んをされ給きうりすしへ乃
たくひとはまにおもしかへ里てこうひいうおく
しきやうありかとかくまゐりたまへまはいつう
おと給き猶よ給うひやのにおもひかこのひ弾へふは
かこちいよくうと物なうはいうしきはさうかの世

よ我れはいつかはと契りすてゝ志侍りなかりし御息所よ
見すくなかりしかされよれうらみとかうけれも屋まとと
のもかう給りんかうう契りし給くやこなむ逢はの
あとさらぬかきりしきまてふも見えけるやうにて
なんはのうちにかこなとかうしてとま人に申すそ給
六条院ハ中宮ハ行すよりつかはしては物語なとゆかりの
給ひハあやしう侍りなる事はまた升ずりとはくも
まいらせぬへくなるとハあけまさとはく御散よかりて
まゐ逢ぬ者はれもれのうちなとうけ給りてまいらせ
まかしう思ひたまへ侍るを本めくも侍らぬ身の御息所
みそさはかうかうぬくいさてとつ給きくも侍てあん

我よわ給の人にはうさくかはきてなくれ行んち
し給もいとつよあさまれかう給かうされ乃とも見
かさうあやしく給まへ世の中逢ふる程まぬよもやと
屋うく思ひなちぬるを承われ人々のまれうれ
うらむまくよりし給なとさきくもやましく侍りし心
うらへにおかしゆめて物きこせたまへなとまめ
屋まなあそびまよりやすそをは給例のいとはつかしおかし
ゆかりの御まゝしけりひまそしくの人乃へ参てふかう
侍し年にはよわもおかはの御さまの後さにやう有
思ひ給へ成らてすまゐ我いは思ひかくまゝ侍りしうて
見る人れも妻きれ世をいとひし思ひなるまゝも

はなかりし心ちうちをゆるさうせうきおりしをまいは
うも見たのしきうけなは美こえうせなしひて
いふさくはときさえおけよおかやさせさまうそしいほ
あはれるまみしのはなかとぬもいはしちうまちはきやうえ
さきしをいはハほことにつかそうれはんよまゐのさ
はきお御うはるひもはらむさうさめなき世といひ
ふるうもさうしていとりし我すのまぬ人見さりや
うきうむきうかはうもあはうさう心屋にうるへ変
ふとにつかそもふかのはかう思めぐはかぬかあし
乃こはなかかぬまひとまのまり妻おふ御なの心え
かへりてひかくえうまをしまうやむすされぶ人を

きりはまうけてもいとはるまじきはりにかんと
やうさおとふうもかえりりおり然るめわかしと
つうす思ひ我こし於故は悲みの情男比く成しう来
らんあわさ成いかな成煙乃なのふまとひたまふ
らんなふよりけまでも人ようとまれ妻わおは名乃わ
なとのいてきうわ巻るすうの院ありえいうしう
かくし於久成況女のはかうひとのくちさうのなくそ
はらん妻こしめし老成はいとおかしうゆうしうえ
なへて此世のいのりしくおかしなわてかわかでも
あ此の於ひかん有様の気えしう我う成かしきを
まのか小はえう既出きさえ故えてたく大我人見御

おわさ候のつれり候かゝるぬさ候よなれきくるまれ
侍りをさ候志候しわるハ御ゝてもなしくるわ候
へきるりに侍りけきと宿くれし往の因はりわ哉
忘きぬさとまて物のあ御さ思残へ座りきまさくはり
物さの承さ哉いうそようい引きりきん人のすゝ然
我もきて侍てのは候ゝさふり此所のを誠もさきの
侍みしうなと座りくつも候りなん思之ゝ候し
すもたくるなとうはめ侍くうの残をまさうもおかし
ぬへ義りと先小児まわ残そうれかのもなん流も
のり候まし悪業とさわなりゝ給つ縁ハうしまふ
やとハおゆり捨侍るぬりなん目連り佛よちう義

ひしまれ方まて一ちにすくひりんためしぬも
えはうき残ハさるむ物りる玉のまむさしすてさを
残りんもこの世まはうしみ残る座りなゐわさなれ
やうしく候はこ残さしをさめ残ての此はけふわ
きくへ志とをさ出物へさりのを思折ひこ侍至
なりる物さはしきやうに志川りみるかいもな義
やうな候あわさ候まはを更らし侍まはくみはゝる
の候とめ小えへて亡き侍うふと思ひ残ふ候もけよ
しうゝ候おきなき業あまるとむすなへてさるの
なくいとひ侍てまかしきこと生ぐんかりし残へと
あ哉やはしふくおはみのはりさ候ともなわまん

らむ地にあひてた庭にうるはし清し河のきけさなはゝる
いまゝておはして上達部なとも参り侍んしかとかはりはてゝに侍
をくつかうまつりし侍者共の女房乃ほかあはれなるの
なくひなくいはきさそへつまへ参りひくしさうも
大将乃まうてたまひし人よことかの御さいなともいはまと
なくめやすしとおほしきよな給ふらむ御ゆかりを思ふゆくし
給侍んさしさすくまたらくらしまうおもひし給ひしも
つかよりふかりし思ひ出し給しゝに御簾乃まれよ
いふきうのかんおかし侍遣まうらふいふかされ給てすく
こ侍やほとゝ侍ゆとおなし歳よくゝらふなん中宮う
中ゝ侍りそて給ひともいとさうなかてたく人乃

なりのやうりなくひおりしきのはかいまありしう
中ゝせうしよわも花屋う小侍あつひをとし竹ひ
なよろうもはらうやまうあはさ侍なりうたくうれ
みやは所の御事をおかし屋わはくまうふひの
侍心はしまつはと人の遊くしきこえ給うし
事なまた八功徳乃池を造たてゝおかしいひなかん
いやうらう侍かり西方をおかしともはな侍よ
なわまうは給六条院よかしも侍うゝ侍よいうき給て
侍八講なとをうかりきせ給とう